

防災教育を中心とした実践的安全教育総合支援事業成果報告書

学校名：岩手県立盛岡第二高等学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

- (1) 防災教育・訓練手法等の開発・普及

東日本大震災の教訓を踏まえた避難訓練を行い、生徒が自然災害に対して、自他の命を守り抜くために、危険を予測・回避する力や「主体的に行動する態度」の育成を図る。
- (2) 災害ボランティア体験活動の推進・支援

ボランティア活動を通じて災害を肌で感じ、深く考える機会をつくり、岩手の高校生として何ができるかを考え、自ら行動できる生徒を育てる。

II 取組の概要

- (1) 防災教育・訓練手法等の開発・普及
 - ア 盛岡市シェイクアウト
 - 【期日】 9月1日（木）「防災の日」
 - 【参加者】 全校生徒・教職員
 - 【内容】 地震時における自らの身を守るための一斉訓練



- イ 実践的防火避難訓練
 - 【期日】 10月17日（月）
 - 【参加者】 全校生徒・教職員
 - 【内容】 地震後の火災を想定した消化扉のくくり戸を使用した避難訓練



- ウ 救急法講習会
 - 【期日】 3月6日（月）
 - 【参加者】 1学年全生徒
 - 【内容】 AEDを用いた心肺蘇生法の習得
- (2) 災害ボランティア体験活動の推進・支援
 - ア 台風10号災害ボランティア活動（岩泉町）
 - 【期日】 10月23日（日）
 - 【参加者】 華道部・茶道部16名、引率1名
 - 【内容】 公民館の清掃や生け花等の交流活動



- イ 震災復興ボランティア活動（陸前高田市）
 - 【期日】 11月4日（金）
 - 【参加者】 1学年全生徒、引率10名
 - 【内容】 被災地視察や仮設住宅周辺の除草作業



III 取組の成果と課題

- (1) 成果

防災教育や災害ボランティア体験活動を通じて、生徒を安全に避難誘導する体制の確立を図るとともに生徒自身に自らの命を守り抜くための行動や共助の精神を涵養することができた。
- (2) 課題

本年度の取組を単年度で終わらせることなく、全職員が防災教育への共通認識を深めながら、継続的かつ組織的な指導を行っていかねばならない。

<資料> 1学年震災復興学習の感想文

被災地である陸前高田市を訪れ、ガイドの方のお話を聞く機会を得て、当時の地震発生時の状況を実感することができました。2011年3月11日の地震により、陸前高田市では1760名もの命が失われ、未だに205名の方が行方不明です。東日本全体でも2650名を超える方が行方不明であると伺い驚きました。実際に被災地の視察をして、津波が建物などに与える破壊力や、津波の高さがよくわかりました。そして犠牲者と行方不明者の数の多さから、改めて津波の恐ろしさを痛感しました。盛岡は海に面しておらず、また震災から約5年半が経過してその記憶も風化しつつありますが、災害はいつ発生するかわかりません。私たちは自分の命は自分で守るという「津波てんでんこ」という言葉を大切に、避難方法や避難場所を把握しておく必要があると思います。災害による被害を繰り返さないためにも、一人ひとりの意識を高め、語り継ぐことが大切だと感じました。(A組生徒)

私は、今回の防災安全教育で震災について学ぶことができました。東日本大震災について、内陸の状況しか把握していませんでしたが、陸前高田に行ってみると、海岸部の震災の状況を聞くことができました。それまでは第18波まで津波が続いていたことや、押し波や引き波があったことを全く知りませんでした。避難場所で配給のときに家が残っている人は何も貰えず、酷い言葉を言われた話など、内陸で生活していたから分からないことや、実際に被災した人だから言えるような話も聞きました。被災地では安全だと思っていた避難場所が津波にのみ込まれてしまったり、そのせいで家族や友人が亡くなってしまったり、普段から海を見たり、過去の津波が小さかったことで油断したせいで逃げなかったりという話を聞いて、どんなに小さな災害でも、しっかり逃げることや、普段からの準備が必要だと思いました。この経験を生かせるように災害について考えていきたいと思います。(B組生徒)

今日、陸前高田市に赴き、改めて津波の恐ろしさを実感しました。昨年と同じ頃に陸前高田市を訪れた際にも実感していましたが、1年経っても目に見える変化がないことに本当に驚きました。被災地ガイドの方のお話は、ニュースや新聞で報道されていることよりも重みがあり、実際に体験した人の話・言葉は、どんな報道よりも東日本大震災の被害を知ることができると思いました。ガイドの中で、バスから降り、3月11日に起こった津波の高さを看板や建物で示されている

マークを見ると、やはり私はまだまだ津波の恐ろしさを分かっていなかったのだと思いました。もし、あの時私がこの場所にいたら、あのマークよりも低い建物に逃げて津波にのみ込まれてしまっていたと思います。岩手県民として、風化させないという強い思いを持っていきたいと思いました。(C組生徒)

震災から5年以上の月日が経っても、まだ沿岸は工事のトラックが行き交っています。陸前高田ガイドの方のお話から感じたことは、押し寄せる波より戻っていく引き波がいかに恐ろしいかということです。海へ戻ろうとする波は、すべての物を海の中へと飲み込んでいきます。引き波の力で建物に突き刺さった松を目にし、多くの建物がこうして破壊され、人も襲われたことを思うと恐ろしくなりました。津波による甚大な被害を受けた高田は、まだまだ建築物は少なく、ゆっくりと復興の歩みを進めています。資料館で見た写真のような高田の街並が再び戻ることを心から願っています。私たちは、午前の見学を終え午後には高台へ移動し、仮設住宅周辺の草取り作業を行いました。数時間でしたが、少しでも高田の方々の役に立ちたいという思いで1学年全員と先生方で手分けして草取り作業に汗を流しました。現地のリーダーの方から、「あなた方がやった仕事を次のボランティアが受け継ぐことで支援の輪がつながる」と教えていただいたことが心に残っています。少しでも多くの方が支援に関わり被災地の現状を心に留めてほしいです。(D組生徒)

私は、自身も被災した身であるので、今回の話を聞いて、共感できる場所が多くありました。昔の町並みや地域コミュニティがなくなったことの寂しさや、それが写真や記憶の中に残っていないことの悲しさなどが、言葉に表されてなくともよく伝わってきました。さらに、そこでは、被災地の土の固さや空気の感じが私の故郷ともよく似ていました。被害を受けた場所が違っていても故郷への思いは同じなのかなとも思いました。今回は陸前高田の震災当時の映像も見せていただきました。海から防潮堤を乗り越えてくる波であるとか、建物を壊しながら町を飲み込んでいく波を見て私が実際に見た光景と重なって見えました。正直なところ見ていることが辛かったけれど、被害の規模は私の故郷よりも大きくて復興にはなお時間がかかると感じました。時間がかかったとしても日々一歩一歩前進、そして、復興していったらいいなと思いました。(E組生徒)